

新しい 病害虫 Vol.9



ミツユビナミハダニ (*Tetranychus evansi* Baker & Pritchard)

生態的特徴など

体色は、雌成虫はくすんだ淡橙色、雄成虫は白～淡橙色（写真1、2）。大きさはカンザワハダニ、ナミハダニとほぼ同じである。本種は、休眠性は示さず、ナミハダニ属の中でも非常に高い増殖能力を持つ。植物の葉裏に寄生し、寄生部位を著しく白化させ、高密度になると植物が枯死する場合もある（写真3）。

寄主植物

本種の発生が確認されている植物は、ミニトマト、ナス、ワルナスビ、イヌホオズキなどであり、ナス科植物以外への寄生は確認されていない。

防除対策

- 1) ほ場周辺のナス科雑草（イヌホオズキやワルナスビなど）は、本種の発生源となる可能性があるため除草に努める。
- 2) ハダニ類の防除に利用されている捕食性天敵のミヤコカブリダニ及びチリカブリダニは本種に対する防除効果が低いことが知られており、天敵による防除対策は確立されていない。
- 3) ハダニ類に登録のある殺ダニ剤に対する薬剤感受性は、成虫・幼虫・卵のいずれも高く、他のハダニ類との同時防除が可能である（平成22年度特殊報第1号）。



高知県病害虫防除所

〒783-0023 高知県南国市廿枝 1100

TEL:088-863-1132 / FAX:088-863-7470 / E-mail:160523@ken.pref.kochi.lg.jp
URL : <http://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/?sid=2016>

病害虫防除所では、農作物の病害虫や防除対策、また農薬に関する最新情報を提供しています。

コミドリチビトビカスミカメ (*Campylomma chinense* Schuh)

生態的特徴など

大きさと色彩には変異があるが、成虫の体長は概ね2～3mmで、体色は全般的に淡緑色であるがかなり茶褐色化した個体も見られる(写真1、2)。西日本では普通に見られ、キク科、マメ科の雑草、アカメガシワの花等、多種多様な植物上で生活し、アザミウマ類、コナジラミ類、ハダニ類、アブラムシ類等を捕食する。県内では秋期のセイタカアワダチソウでよく見られる。

：加害を受けた蕾は奇形花となり、裂果、舌出し果等の奇形果が発生する(写真3)。さらに生長点部が強く加害されると叢生化し、花芽形成が阻害される(写真4)。症状は本種を防除した後も2ヵ月以上の長期間に渡って発生するため、著しく減収する。



写真1



写真2

防除対策

本種に対して登録された農薬はないので、野外からの侵入を防ぐために、ハウス開口部へ防虫ネットを被覆するとともに、発生源となるほ場周辺の雑草の除去を行う(平成23年度特殊報第1号)。



写真3



写真4

青枯病

Ralstonia solanacearum (smith 1896) Yabuuchi, Kosako, Yano, Hotta & Nishiuchi 1996

病徴および生態的特徴など

ルリトウワタ(通称: ブルースター)で感染が確認された。発病株は、はじめ下葉に萎凋、黄化がみられ、徐々に上位葉へ進展する。症状が進むと下葉から落葉し、やがて株全体が枯死する。病勢の進展は速やかで、発症から約10日で枯死に至る(写真1)。

発病株の茎を切断すると、切断面から白色の菌泥が噴出し、切断面を水に浸けると細菌が糸を引くように流出する。ただし、ブルースターは茎から白色の汁液が出るため、判定には注意を要する。本病原細菌は土壌伝染する。また、植物体の傷口などからも接触伝染する。ブルースター以外ではトマトへの病原性が確認されている。

防除対策

- 1) 本病原細菌は土壌伝染するため、太陽熱や土壌くん蒸剤による土壌消毒を行う。
- 2) 感染株は伝染源となるため、発見後は直ちに抜き取り、ほ場外に持ち出す。
- 3) 本病原細菌は接触伝染するため、収穫作業等に用いるハサミなどはうね毎に換えるなどの工夫をし、伝染させないように注意する(平成23年度特殊報第2号)。



写真1

軟腐病 (*Erwinia chrysanthemi* Burkholder,McFadden&Dimock 1953)

本病原細菌は様々な作物に感染することが知られているが、ミョウガで初めて感染が確認された。

病徴および生態的特徴など

はじめ花蕾の一部が淡褐色～褐色に変色し、水浸状に軟化する。病勢の進展は速やかで、高温時は発症から3日程度で花蕾全体が腐敗する（写真1、2）。腐敗臭はほとんどない。

発病適温は25～35℃であり、10℃以下では発病しない。

防除対策

- 1) 本病原細菌は植物体の傷口から感染するため、収穫時などに花蕾に傷をつけないように注意する。
- 2) 銅剤は本病害に対して予防効果があると考えられる。
- 3) 腐敗した花蕾は伝染源となるため、発見後は直ちに切り除き、ほ場内に放置しないよう注意して、適正に処分する。
- 4) 本病原細菌は接触伝染する可能性があるため、腐敗した花蕾の周辺部の収穫は最後に行う等の工夫をし、伝染させないように注意する（平成23年度特殊報第3号）。



写真1

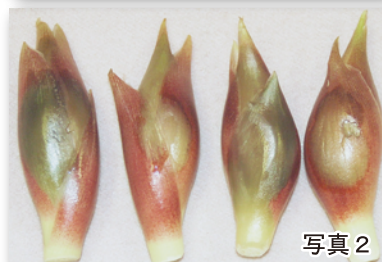


写真2

チャトゲコナジラミ (*Aleurocanthus camelliae* Kanmiya and Kasai)

生態的特徴など

- 1) 成虫の体長は雌が約1.3mm、雄は約1.0mmでやや小さい。前翅は紫褐色で不整形の白斑があり、虫体は橙黄色であるが白粉で覆われているため灰色に見える（写真1）。孵化幼虫は淡黄色で、2～4齢幼虫は光沢のある黒色で周囲に白色ロウ物質があり、周囲と背面に多数の刺毛を有する（写真2）。卵は長さ0.2mm、淡黄色の勾玉状で、葉裏に産卵する。

京都府農林水産技術センター
茶業研究所より提供



写真1



写真2

防除対策

- 1) 幼虫は下位葉、成虫は新芽でよく確認されるので、定期的にこれらの部分の葉裏を観察し、早期発見に努める。深刈りせん枝などにより寄生葉を除去し、密度抑制を図る。なお、せん枝した枝葉は本種の発生源となるため、放置せず土中に埋設するなど適切に処理する。
- 2) 成虫は黄色に誘引されるため、黄色粘着トラップを茶園に設置し、発生を確認する。
- 3) 本種の発生を認めた園では薬剤による防除を行う。防除適期は、若齢幼虫の発生時期で、散布前に深刈りせん枝やすそ刈り等を行うと薬剤がかかりやすくなる（平成23年度特殊報第4号）。



写真3

フザリウム立枯病

Fusarium striatum Sherbakoff (*Haematonectria ipomoeae* (Halsted) Samuels & Nirenberg)

本病原菌は、トマトの立枯病を引き起こす病原菌として知られているが、我が国でナスに対する病原性が確認されたのは初めてである。

病徴および生態的特徴など

一部の葉が水分を失って緑色を保ったまましおれ、症状が進むと株の基部には表皮のひび割れ、陥没が認められ(写真1)、表面に赤い小粒(子のう殻)が形成される場合が多い(写真2)。さらに症状が進むと枯死する(写真3)ことがあるが、萎凋から枯死までには、かなりの時間を要する場合が多い。枝に発生する場合もあり、枝の表面が黒褐色に変色し、発病部より先は枯死する。伝搬様式ははっきりわかっていないが、土壌中に残った病原菌が感染源になると考えられ、発病後は形成された分生子や子のう胞子の飛散により、二次伝染が起これんと思われる。



写真3

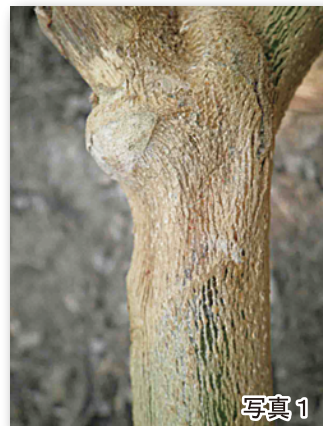


写真1



写真2

防除対策

- 1) 土壌くん蒸剤や太陽熱利用による土壌消毒を実施し、第一次伝染源となる病原菌密度を低下させる。
- 2) 過度の灌水を避けるとともに、暗きよなどを設けて、ほ場の排水をよくする。
- 3) 発病株は伝染源となるため、発見後は直ちに除去し、ほ場内に放置しないよう注意して、適正に処分する(平成24年度特殊報第1号)。

茎えそ病

Chrysanthemum stem necrosis virus (CSNV)

本ウイルスは、平成18年に広島県で初確認されたが、本県で確認されたのは初めてである。

生態的特徴など

本病は、茎に明瞭なえそ症状を(写真1)、葉には退緑・えそ症状を生じる(写真2)。トマト黄化えそウイルス(TSWV)によるキクえそ病の病徴と酷似している。CSNVは、主にミカンキイロアザミウマによって媒介される。1齢幼虫でウイルスを獲得し、成虫が伝搬する。経卵伝染はしない。また、罹病株からの挿し穂等による栄養繁殖でも伝染される。種子伝染や汁液伝染、土壌伝染はしないと考えられる。キク以外では、トマト、ピーマン、アスター、トルコギキョウへの感染が報告されている。



写真1



写真2

防除対策

- 1) 親株には健全株を用いる。発病が見られたほ場の株は、病徴がなくても親株には使用しない。
- 2) 発生ほ場では罹病株を抜き取るとともに、媒介虫のミカンキイロアザミウマを防除し、二次伝染防止に努める。
- 3) ミカンキイロアザミウマの防除にあたっては、薬剤防除だけでなく、防虫ネットの設置などにより侵入防止に努める。
- 4) ほ場内及び周辺の雑草はミカンキイロアザミウマの繁殖場所となるため、施設内外の除草を徹底する(平成25年度特殊報第1号)。